

二〇二四年三月 島根大学社会福祉論集 第九号 抜刷
島根大学人間科学部福祉社会教室

大仏空著作集 (三)

——IV 歴史へのまなざし／V 晩年の思索

山崎 亮 編

大仏空著作集(三)——IV歴史へのまなざし/V晩年の思索

山崎 亮編

はじめに

この「大仏空著作集(三)」では、大仏空(一九三〇—八四、本名は晃、のちに尊教)の著作のなから、茨城にまつわる歴史関連の論考二編を「IV歴史へのまなざし」として、また、一九八四年、大仏最晩年の書簡と録音ならびに死の直前に印刷業者に委ねていた短文を「V晩年の思索」として収録する。さらに、今回新たに発見された、一八歳の大仏が父晃雄に宛てた書簡を付録として収める。

前回の「大仏空著作集(二)」の「はじめに」では、一九七〇年代末までの大仏の活動、ならびに「青い芝の会」の全体的な動向を一瞥したが、ここでは補足的にいくつかの事柄に触れておきたい。

一九六七年一二月以降、横田弘や横塚晃一ら脳性マヒ当事者の夫婦が次々と閑居山願成寺を離れ、さらに一九六九年七月の大仏による矢田龍司殴打事件が契機となってマハラバ村は瓦解した、と一般にはみなされている。けれども願成寺ではその後も、さまざまな事情を抱えた障害者や小児を受け入れ、大仏とその妻照子を中心にして、アジールとも称すべき共同生活が続けられていく。大仏は、茨城青い芝の会とも連携しつつ、引き続き障害者運動に関わっていたが、無免許でのスピード違反で検挙され、一九八一年一月から一〇ヶ月間、中野刑務所に収監される。一方で一九八四年、大仏は、浦和拘置支所に勾留されていた竹本信弘(一九四一—)と文通するようになる。自身の収監体験と関連があるか否かも含めて二人の接点は判明ではないが、竹本に宛てた書簡の控えが残されていて、そこには大仏最晩年の思想を読み取ることができる。

その後、大仏は一九八四年六月に体調を崩し、七月六日には霞ヶ浦国立病院に入院、そのまま敗血症で他界する。享年五三であった。翌年、照子も願成寺を後にし、こうして名実ともにマハラバ村は終焉を迎えることになる。

この間の大仏の執筆活動としては、郷土誌『ときわ路』や茨城青い芝の会の機関誌『青い芝』への寄稿、『朝日ジャーナル』の投書欄への投稿が見られる程度である。一方で、願成寺で共同生活する障害者たちを対象とした講義の録音テープが多数残されており、増田レアさんによる文字起こしの作業が続けられている。

本稿の「IV歴史へのまなざし」所収の二編の論考は、六〇年代末から七〇年代初頭にかけて発表されたものである。また「V晩年の思索」所収の文章のうち、「C.P.について」は、一九八四年に録音されたと推定されるテープを増田さんが文字起こしたものであり、竹本信弘宛書簡と並んで、大仏の思想の到達点とみなすことができる。付録に収める若き大仏の書簡の掲載を快諾していただいた点も併せて、増田さんには今回も大変お世話になった。篤くお礼申し上げます。

ここまで三年にわたって大仏の著作を公にしてきた訳だが、これらを通読することによって、彼の思想の全貌を窺うことができるはずである。もとより、その難解な思想については、種々の見地から多様な解釈が可能ではある。私なりの試みを『島根大学人間科学部紀要』七に発表しているので、併せて参照いただければ幸いである。

註

(1) 増田レア『無縁の地平に——大仏照子の生涯』(マハラバ文庫、二〇一五年)、一七一頁。

(2) 京大経済学部の助手在職中に朝霞自衛官殺害事件への関与を疑われて指名手配され、一〇年あまりの潜伏生活を経て逮捕された新左翼の理論家。滝田修のペンネームで知られる。

- 大仏空著述目録（未定稿。○はすでに本著作集（一）（二）に収録したものを、また◎は本稿に収録するものを、さらに各項目のアラビア数字は本著作集への収録順を示す）
- ◎19 大仏晃雄宛書簡（一九四九年七月）
 - ◎1 大仏晃『聖道念仏義抄文』（一九五〇年代半ば？）
 - ◎2 折本昭子宛書簡（一九六一年八月二四日）
 - ◎3 折本昭子・大仏空「安楽死賛成論（往復書簡）」（『しののめ』四七、一九六二年四月、三一〜三六頁；立岩真也編『与えられる生死：1960年代』Kyoto Books, 2015に再録）
 - ◎4 六角大仏盲眼「袋井 徳君」（『しののめ』五〇、一九六三年六月、「プロフィール」より、三五頁）
 - ・『座談会』五〇号でんやわんや」（佐藤文寿・平田淑雄・大仏空（『しののめ』五〇、一九六三年六月、五二〜五六頁）
 - ◎5 大仏空「非自己」（『しののめ』五〇、一九六三年六月、九一〜九四頁）
 - ◎6 大仏空「寂（サビ）とは？——中曾根君への反論」（『しののめ』五四、一九六四年一〇月、六二〜六四頁）
 - ・編集部「前号合評」（二日市・飯島・山北・今井・横田・大仏・花田・鎌田「文責」）（『しののめ』五四、一九六四年一〇月、九〇〜九二頁）
 - ◎7 大仏空「最大の念仏者 キリスト」（歎異抄研究会『親鸞』九、一九六六年四月、二九〜三〇頁）
 - ◎8 大仏空「ウン：そうだ、タンニ抄だ！」（歎異抄研究会『親鸞』一〇、一九六七年八月、四五頁）
 - ◎14 大仏空「茨城の郷土史散歩から見た本願寺の成立」（日本仏教研究会『日本仏教』二九、一九六九年一月、四四〜四七頁）
 - ◎9 大仏空「社会福祉は治安維持の道具か」（『朝日ジャーナル』「二二一七」一九七一年二月一九日号、特集・手記「私にとつての国家」2 檻の中の差別、二二〜二三頁）
 - ・大仏空「唯円」について——横曾根の平太郎だ」という説（歎異抄研究会『親鸞』一四、一九七二年四月、五四〜五八頁）
 - ◎15 大仏空「将門の一族を考察する」（『歴史読本』一九七二年六月号、二六七〜二七一頁）
 - ・大仏空「序文」（一九七五年四月）（横田弘『ころび草——脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』「自立社」、一九七五年八月、四〜八頁）
 - ・大仏空「異端の系譜」（同書所収、一二四〜一六四頁）
 - ・大仏空「覇権とはなんだ」（『朝日ジャーナル』「一七三三」一九七五年八月一日号、「読者から」、一一六〜一一七頁）
 - ◎13 大仏空「インタビュー構成おのれの地獄を見きわめよ——CP（脳性マヒ）者とともに生きて」（一九七五年八月二五日）（『月刊東風』四三、一九七五年一〇月号、八〜二九頁；石川次郎『地方論への試み』「辺境社」、一九七六年、三四〇〜三七五頁に再録）
 - *資料として、山形青い芝の会「宣言」（一九七五年八月）、横田弘『ころび草』序文の改訂版、横塚晃一「敗軍の兵」（整肢療護園同窓会『同窓会誌』三三、一九七〇年二月）を含む。（資料も含めて小山正義『いきさま——ある脳性マヒ障害者の半生』「JCA出版」、一九八一年）に再録、二二〜一八八頁）
 - ◎10 大仏空「解説」（青い芝の会全国常任委員会 会長横塚晃一『CP解放運動のめざすもの』「JCA出版」、一九八一年）に再録、二二〜一八八頁）
 - ◎11 大仏空「解放理論研究会テキスト」（茨城青い芝の会、一九七九年四月、全一〇頁）
 - ・大仏空「解放理論研究会テキスト No.1」（解放理論研究会、一九七九年二月、全二頁、「風乱軒主人」の記名）
 - ◎12 大仏空「序文（人は我々をアナキストだと云う）」、大仏空「解説（解放理論研究「会」テキスト）」（『CP解放運動のめざすもの（他二編）』解放理論研究会テキスト（三版）、解放理論研究会 横塚りゑ方、一九七九年二月、所収、一〜四頁、四一〜六二頁。横塚晃一「CP解放運動のめざすもの」、横塚晃一「社会科学としての労働」とともに収録。大仏の「解説」の内容は『解放理論研究会テキストNo.2』に同じ）
 - ・大仏空「悪人こそ正しいのだ」（茨城青い芝の会『青い芝』二三、一九八二年三月、一〜二頁）
 - ・内藤・和尙「大仏」・高橋・折本・角田・金子「討論会「セックス・愛・結婚」について」（茨城青い芝の会『青い芝』二三、一九八一年三月、三〜五頁）
 - ・大仏空「大仏空講義録」（一九八一年一月一九日〜二二日、ならびに一九八三年実施の講義テープを増田レア氏が文字起こしたもの）
 - ・大仏空「平将門と鉄王伝承」（二）「ときわ路」八、一九八二年五月、六二〜六八頁、（二）「ときわ路」九、一九八三年一月、九二〜一〇三頁）
 - ・大仏空「茨城青い芝夏期キャンプ討議資料（恋愛・結婚・性）」（一九八三年八月一日、講義草稿）、改訂版（一九八四年四月二二日）（里内龍史ほか編『大いなる叫び——茨城青い芝の会の障害者解放運動』「発行者 里内龍史、二〇二二年」に収録、二二七〜二三四頁）
 - ・大仏空「先祖崇拜を見直す」（『朝日ジャーナル』「二五五三」一九八三年二月二三/三〇日号、「読者から」、一一二〜一一三頁）
 - ◎16 竹本信弘宛書簡（一九八四年二〜六月）

◎17大仏空「CPについて」(おそらく一九八四年に録音されたテープを増田レア氏が文字に起こしたもの)
◎18大仏空「最後の言葉」(一九八四年)

*今回新たに、茨城青い芝の会『青い芝』二三(一九八一年三月)に大仏の論考が掲載されていたことが明らかになったが、これは、立命館大学先端総合学術研究科博士課程の山口和紀氏の情報提供による。記して謝意を表したい。

収録文題目一覧

IV 歴史へのまなざし

- 14 「茨城の郷土史散歩から見た本願寺の成立」(日本仏教研究会『日本仏教』二九、一九六九年一月) 大佛 空
15 「将門の一族を考察する」(『歴史読本』一九七二年六月号) 大仏 空

V 晩年の思索

- 16 竹本信弘宛書簡(一九八四年二、六月) 大仏 空
17 「CPについて」(一九八四年?) 大仏 空
18 「最後の言葉」(一九八四年) 大仏 空

付録

- 19 大仏晃雄宛書簡(一九四九年七月?) 大仏 晃

凡例

・表記は新字・新仮名遣いに統一し、原文に見られる明らかな誤字・脱字・誤植等は修正した。句読点も適宜補正している。通常の用法ではないが大仏独自の表現と目される場合は、原文のまま、(ママ)のルビを付している。
・「」内は編者による補足である。
・固有名詞を中心に、文意を辿る上で最低限必要と思われる語句にアスタリスクを付し、各文章ごとにナンバリングして註記している。
・文中の引用文は原則としてそのまま掲載し、異同がある場合は必要に応じて註を付して原文を示した。
・16は増田レア氏所蔵下書き原文のコピーを底本としている。17は増田氏による文字起こし原稿を収録した。18は、増田氏が運営するマハラバ文庫のウェブサイト上の「一九八四年七月六日の文章」(<http://maharabunko.private.coocan.jp/kaihourion/sinkaihouhtml.html>)を底本としている。19は大仏が一八歳のときに父親に宛てた書簡であり、増田氏により今回新たに発見されたもので、付録として掲載することにした。なお、16と19に関しては、プライバシーに関わる箇所を一部割愛している。
・書誌情報等を中心にした簡単な解題を末尾に付す。
・大仏空の思想に関する解説としては、『島根大学人間科学部紀要』七に掲載した拙稿「大仏空の宗教思想と「青い芝」——自覚と叫びとしての念仏」を参照されたい。

*本稿は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究(C)(一般)課題番号19K00082「日本における障害者自立思想の覚醒と大仏空の宗教思想との関連の宗教学的検討」による研究成果の一端である。

IV 歴史へのまなざし

14 茨城の郷土史散歩から見た本願寺の成立（日本仏教研究会『日本仏教』二一九、一九六九年一月、四四～四七頁）
大佛おほぶつ空あきら

いうまでもなく本願寺はわが国最大の門徒「教」を誇る浄土真宗の総本山であり、親鸞「一一七三—一二六二」四代の孫、覚如「一二七〇—一三五二」によって創建されたといわれている。

しかし、覚如自身は決して初代といわず、親鸞が初代であり、その孫の如信「一二三五—一三〇〇」をはさんで自分が三代目であると称している。これはなにを意味するのか、覚如が自分の存在を権威づけるために、ありもしない初代と二代を作ったのであろうか。そうでないとすると、親鸞の時代にすでに本願寺はあったのであろうか。もし覚如のいう通り、親鸞が初代だとするのなら、なぜ覚如はその祖廟の寺院化を図った時、比叡山から横槍が入って遂に断念した専修寺の寺号を掲げようとしたのであろうか。

私はやはり、本願寺の初代は親鸞であったと考える。しかしそれは京都にはなかったのだと思うのである。

常陸風土記の那珂郡の条に

自_レ其東北 挟_二粟河_一而置_二駅家_一 当_二其以南_一 泉_二出坂中_一 多_二尤清_一 謂_二之_一 曝井_一 縁_レ泉所_レ居 村落婦女 夏月会集 浣_レ布曝乾_二

という箇所がある。ここに書かれた粟河とは現在の那珂川のことである。また泉が出るという坂は現在の水戸市内の愛宕山下といわれている。それから十キロほど川をさかのぼった処に阿波山（大山）神社があり、さらにその附近に岩舟神社がある。この阿波山神社に如信が住んでいたというのである。勿論この阿波山神社大山禅坊は、神社と仏閣の両面を兼ねた存在だったのであろう。

粟（阿波）という言葉は、神が来迎する処という意味を持っている。全国に粟島・淡島・青島などと呼ばれる地名が沢山あるが、いずれも神が来臨するところ、流れついたり、天降ったりした処という伝説を持っている処で、

典型的には淡島神社の縁起であるが、もっともこの淡島神社とスクナヒコナの神の場合は、淡島の山頂の粟の莖に登ってはじかれて常世の国へ去ったというのだし、紙人形を海や川に流すことによって悪霊を追い払う神事を持っているのであるから、神の来迎だけでなく流離する処でもあった訳である。

そうすれば、先述の風土記に見られた泉の流れ出る坂に面した河原に、夏のある時期に会集して布を洗ぎ曝した、ということが意味をもって来るのである。単なる洗濯ならばいくら古代人であっても、夏のある時期だけでなく、冬でも春でも行なわなければならないはずで、ある一定の時期に会集して布をそそぎさらしたというのは神事を意味しているのである。それは神の来迎を待つタナバタツ姫の行事を意味している。

タナバタツ姫に関しては、折口信夫博士や柳田国男先生の著作を参考にしてもらうとして、ただ夏のある時期に神や祖霊を待つために、新しい衣服を、えらばれた処女が織って、それを着せられた霊をまつり、またそれを送る（つまり流したり燃やしたり）。これが日本仏教のお盆の起りであるし、えらばれた乙女がタナバタツ姫であり、七夕祭にも連がるもので、私の考えでは当麻曼荼羅を織った中将姫の伝説も、この伝統の中から生まれたものではないかと思っている。なぜなら、新しい衣服を織って着せるとしても、神や霊では結局は織った衣服そのものが神のよりしろになると考えられるから、中将姫の織ったマンダラも、織るといふ行為そのものに、さらに織り上げられたマンダラに如来の来迎を見ることが、このタナバタツ姫の伝統に沿ったものといえると思う。

粟河、阿波山（大山）という地名といい、このタナバタツ姫の神事といい、一種の来迎思想が、浄土教を受け入れる素地としてあったと見る訳である。大山禅坊は、現在水戸の北方十キロほどの額田町に移って阿弥陀寺を名のっているが、縁起によると、覚如が亀山天皇より久遠実成阿弥陀本願寺という寺号を下賜されたのを、本願寺の名称だけを京都に残し、阿弥陀寺の名称の部分を譲られてきた寺号だといっているのであるが、覚如が寺号を天皇から許されたという記録もなければ、当時の状況から考えてあり得ようもないのであるから、これは逆に久遠実成阿弥陀本願寺という寺号が大山禅坊にあったのを、覚如は、阿弥陀寺を大山禅坊に残し、本願寺という名称を京都に持ち

帰ったと考える方が自然だと思ふ。

覚如は大山禅坊に来て、そこにあつた親鸞聖人が画かれたという三尊六高祖の本尊（十字名号の左右に聖徳太子と法然上人を配した三尊仏）を写して本願寺の本尊とし、この三尊仏は京都本願寺と大山禅坊だけに許して、他寺には許さなかつたと寺伝は伝えている。

覚如が専修寺という寺額を、世尊寺経尹に書かせて、比叡山の反対で遂に断念したのが正和元〔一三二二〕年で、それに代つて本願寺という名称が記録に残る最古とされるのが、元亨元〔一三二一〕年二月の日付を持つ親鸞門弟言上書だとされるから、その間に覚如は留守職をしていた祖廟を、本願寺という寺格として確立するのに成功したと考えられる。とすれば、正和元年つまり叡山の横槍で専修寺の額を撤去せざるを得なかつた年の正月、覚如は東下して、恐らく場処はこの大山禅坊で如信の十三回忌を営み、そのことによつて東国の門徒に如信の、そして親鸞の正統の後継者たることを示し、本願寺の名称を得ることも承認させたと思ふ。

如信在世中には、如信より年長の、しかも親鸞面授の門弟もまだ多数生きていたであろう。それらの中には必ずしも如信の権威を認めようとしな人もいたにしても、それでも如信が親鸞の正統の後継者たることは疑いようもなく、その年忌を覚如に主催させたことは、また後継者たることも承認したことになるのではないだろうか。

覚如は祖廟の本山化に一生をかけたといつても過言ではない生涯を送つたのであるから、当然如信の後継者たることにも力を入れたと思ふ。覚如が専修寺という寺号を考えた時に比叡山などからの反対でつぶされるかもしれないという事ぐらいは考えていたかもしれない。私は覚如が京都に帰つて祖廟の寺院化を図る行動に出る前に、如信とも談合して本願寺という寺号も譲り受けて置いたのではないかと思ふ。

ではなぜ、京都に帰つた覚如はいきなり本願寺とはせず、専修寺を名のろうとしたか？現在この大山禅坊には慈覚大師の作と伝えられる如来像がある。また親鸞聖人の比叡山における回峰行の白衣の姿、つまり自力聖道門の英姿を乗信坊が画いた全国ただ一つと称する絵姿が残っている。

この慈覚大師作の如来像は、愚考するところ熾盛光如来ではないかと思ふ。

熾盛光如来は、慈覚大師円仁〔七九四—八六四〕が初めてわが国に修（將來也）法した仏であり、光明の仏として釈迦と阿弥陀の両面を持つ如来である。中央アジアやタリム盆地で発掘されるという炎を背負つた如来像が、阿弥陀仏の発生に非常に関係が深いといわれているが、これが熾盛光如来の前身ではないだろうか。円仁は記録で見ると、日本人として善導流の念仏を体験した最初の人であるし、円仁以前のわが国にあつた浄土教と違つて、円仁以後のそれは空也にしても良忍にしてもさらには源信にしても、口称念仏を重視してきつあつた。円仁はその金剛頂経疏の中に「大乘経（法華経）は理あつて事なし」と、天台法華宗の持つ根本的欠陥、つまりその壮大華麗な一念三千の観念哲学も、現実の愚痴蒙昧の凡夫の苦悩を救うにはあまりにも力がないことを強く自覚していたことがわかる。そこで円仁は、法華経の本尊たる久遠実成の釈尊と愚痴蒙昧の凡夫の来世の救済主たる阿弥陀如来の両面を持つ熾盛光如来をもつて本尊としたのではないだろうか。円仁以後の空也にしても良忍にしても源信にしても理は法華経にとり、事は口称を行ふ、といった念仏である。私の知っている限り、この熾盛光如来をもつて本尊としてゐるところは、円仁直系の京都粟田口の青蓮院だけである。

もし私の推測が当たっていれば、この大山禅坊は青蓮院の末寺だったのでないかと思ふのである。

かくして覚如は一宗の独立を図るために、専修寺の額を掲げたかつたが、比叡山に反対され、しかたなく青蓮院末たる本願寺という次善の妥協策を執つたのではないか？と思ふ。本願寺の代々の法主の得度が、青蓮院で行われなければならなかつた「しきたり」の理由もこれで説明がつくのである。

阿波山神社の別当は堯範阿闍梨といい、三井寺の沙門だつたと寺伝は伝えられている。同じ三井寺出身の山伏（神官と仏僧の両面を持つ者）に播磨公弁円、のちの明法坊がいる。堯範阿闍梨は親鸞の門に入つて乗信（または定信）となるのであるが、寺伝では佐竹氏の出と伝えられている。しかし、当時北関東は、鹿島神宮系の神官がほとんどを押えていたというから、多分この乗信も佐竹氏とも血縁はあるにしても、鹿島系の神官だつたと思われる。親鸞聖人の関東における旧跡の一つ一つを歩いて見ると、いかに鹿島神宮と関係が深いかわかる。この大山禅坊阿弥陀寺にも親鸞聖人が刻まれたという鹿島明神像

が宝物として存している。

鹿島系つまり藤原・中臣系の者で親鸞の門下に入った、そしてそれ以前には神官と仏僧としての両面を兼ねた（つまり山伏の様な）、そしてさらに地方豪族としての性格も持っていたと思われる者に、報恩寺の性信、無量寿寺の順信、宍戸の唯信、常福寺の入信、等覚寺の了信とおり、さらに無名の門弟も多数あつただろうと思われる。しかも皆、法名の下に信の字をつけている。阿弥陀寺の乗信もやはり、その中の一人ではないかと思う。親鸞門弟中の大立物であつた性信や順信については、その神官としての面から見た伝説の解釈があるが、ここでは省く。ただこれらの鹿島勢は、土地の豪族たる佐竹氏や宇都宮氏としきりに通婚して、さらには、平氏や源氏とも通婚し、時には平氏に組し、時には源氏の家人となつたことをしていたらしいのであるが、特に藤原の鎌足が鹿島で産まれたとの伝承を持ち、藤原一族の、しかもこちらの方が本流だという意識が強かつたようである。

親鸞が茨城に來下する前に、この地の宗教に大きな影響を与えた人物に、藤原仲麻呂「七〇六一―六四」の子といわれる徳一大師がある。彼は伝説の人かもしれないが、中将姫の從兄に当り、その中禅寺を建てた筑波山も当麻寺と同じく二上山（二つの峯のある山、もしくは二柱の神をまつる山）として有名である。

この二つの峰の間に夕日が臨む姿は、折口博士の天才的直観によれば源信の画いた山越弥陀の理想をはぐくんだとされるが、それ以前に徳一によって、この東国にも伝えられており、同じ藤原系としての自覚のあつた鹿島系神官群の中にも浸透していたのではないだろうか。徳一の建てた中禅寺の発掘物から想像するのに、徳一は相当大規模な宗教勢力を有していたことが考えられる。

順信の出自は片岡氏といい、大中臣氏の分家といわれるが、この片岡の發生伝説は、常陸風土記の先述の項の前に書かれてあるが、これも古事記に出て来る神の來臨する地名、高千穂の「くしふれ」二上の峯という名称と関係があり、その片岡の里は大山禅坊のあつた粟から南へ十キロの地点である。現在は八田という地名になっており、宍戸の唯信、八田の入信、筑波の了信等の出自たる八田氏は、この片岡氏の分家と思われる。伝説では、源義朝が

八田家の姫に産ませたのが、頼朝の寵臣八田知家だといひ、さらにその子が宍戸の唯信と、筑波山の別当となつた千寿丸、のちの了信だといふ。また片岡の順信は、源義経股肱の臣で、亀井片岡伊勢駿河と並び称せられた豪傑だつたと寺伝では伝えてゐる。

この片岡の庄八田の里から三キロほどの処に、大網という地名があるのは見逃せない。さらに、大山禅坊のあつた粟付近を親鸞聖人は故郷の東山と似ているのに心ひかれたと寺伝は伝えており、「最須」敬重絵詞にいう如信の居住した奥州東山とは、このことだと思われる。つまり奥州東山というの地名でなく、親鸞聖人のいわれた奥郡にあつた東山に似た処の意味に解してよいのではないだろうか。そして、大山禅坊のあつた地点の対岸二キロばかり西に、なんと三善という地名がある。もしここに三善氏の所領があつたとすれば、恵信尼もこの大山禅坊附近に居住していたかも知れない。

この三善の反対の方角に岩舟神社がある。岩舟とは神が天降るとき乗つて來る舟という意味である。この岩舟神社の伝説も親鸞と関係のあるものなのであるが、いまここでは省かなければならない。ただ、如信の遺孫の寺号が岩船山大綱願入寺というのは、偶然ではないと思う。

那珂川の交通の便といい、それにこの地点は親鸞門弟の最も多く集中的に居住している地域の中心にあつており、大綱や東山を福島県の竹貫村とする説は、門弟達の居住地域と離れすぎていて、無理な説と思う。私はこの阿波山に親鸞が來下する以前から、天台系沙門の堯範阿闍梨の住する久遠実成阿弥陀本願寺があつたのだと思うのである。

覚如は正和三「一三一四」年に西山別院となつた久遠寺を建てたと伝えられている。この久遠寺という名称は明瞭に久遠実成阿弥陀本願寺からとつたと思われるから、その時に本願寺という寺号も独立させたと思つてもよいと思う。つまり正和元年、専修寺の掲額に失敗した時にはすでに準備してあつた、常陸にあつて藤原系中臣系のしかも青蓮院末としての寺格を持つ本願寺を名づけることによつて、とにもかくにも祖廟の寺院化に成功したのだ、というのが私の推論である。

（追記）大山禅坊が現在の阿波山神社にあつた！という調査は「茨城と親鸞」〔寺崎義雄編「親鸞と茨城」茨城県文化財保存会、一九六二年〕の著者寺崎

義雄氏が、口碑や各寺院の縁起などを頼りに出された結論をさらに教示して戴きました。

*1周知のように親鸞は、念仏停止の宣旨による建永の法難により、建永二(一二〇七)年、師である法然(一一三三—一二二二)らとともに流罪となって、越後に

流された。建暦元(一二一一)年に赦免になったあと親鸞は京には戻らず板東に居を移し、とりわけ常陸を中心に、独自の教えを広めていた。文暦元(一二三四)年頃帰京し、板東での布教は息子の善鸞(生没年未詳)に委ねるが、善鸞は親鸞の意に沿わず門徒たちの混乱を招き、ついに建長八(一二五六)年、親鸞は善鸞を義絶するに至る。如信は善鸞の子であり、父とともに赴いた板東にとどまっていた。一方、覚如は、親鸞の末娘覚信尼(一二二四—一八三三)の孫であり、親鸞の墓所大谷廟堂の留守職を継ぎ、本願寺教団の実質上の祖と目される。

*2新編日本古典文学全集5『風土記』(小学館、一九九七年)では、「自郡東北、渡粟河^レ而置^レ駅家。……当^三其以南、泉出坂中^一。多流尤清、謂^三之曝井^一。縁^レ泉所居村落婦女、夏月会集、浣布曝乾^一(同書、四〇六頁)とある。

*3おそらく、折口信夫「水の女」の一二「たなばたつめ」(『民族』三一、一九二八年)、『折口信夫全集』第二巻「古代研究(民俗学篇1)」(『中公文庫』一九七五年)や、柳田国男『日本の伝説』中の「機織り御前」(『三国書房』一九四〇年。初出は『日本神話伝説集』「アルス、一九二九年」)、『柳田国男全集』第四巻「筑摩書房、一九九八年」などが念頭にあろう。

*4折口信夫の著名な小説『死者の書』(青磁社、一九四三年)、『折口信夫全集』第二四巻「中公文庫、一九七五年」は、当麻寺曼荼羅縁起の中將姫をモデルとしており、その中心的なモチーフとして二上山の山越し阿弥陀が取り上げられるのだが、折口は「山越しの阿弥陀像の画因」(『八雲』第三輯、一九四四年)、『折口信夫全集』第二七巻「中公文庫、一九七六年」のなかで、このモチーフについてみずから解説している。

*5天孫降臨の地は、実際には記紀ともに「高千穂のくじふる嶺^{たけ}」と記されている。

15 将門の一族を考察する(『歴史読本』一九七二年六月号「読者招待席」、二六七—二七一頁) 大仏 空 (茨城県石岡局区内閑居山)

鳥羽の海と鬼怒川の改修

むかし筑波山の西側に大きな湖水があった。鳥羽の海と呼ばれ、北は茨城県下館市から南は同下妻市高道祖の南、安食あたりまでの南北にやや長い形の湖だった。

『万葉集』にはこの鳥羽の江を琵琶の淡海に、筑波山を比叡山に見たてて都風になぞらえた記述がみえる。しかし記述だけでなく事実関係は深かったらしい。『万葉集』に出てくる鳥羽の田井の地名も、琵琶湖畔にある地名だが、鳥羽の江の南岸の安食村もまた、田井同様湖畔にある地名である。そしてこの安食という地名は、『古事記』に出て来る百済王の使者として、良馬を持つて応神朝期に来朝し、帰化したといわれる漢皇室の裔・阿知吉士の一族が住みつき土着したところだといわれ、とくに中仙道沿いに関東まで多く見られる地名である。

鬼怒川の改修は天平宝字二年(七五八)、問民苦使^{*}浄弁が奏上して官許を得て十年後の神護景雲二年(七六八)に着工した。『続日本紀』には「下総国結城郡小塩郷小島村から常陸国新治郡受津村に達する一千余丈を堀り」と鬼怒川(毛野川・絹川)の流れを変えたことが記録されている。

当時、鬼怒川は栃木県芳賀郡二宮町の大島(『続日本紀』にある小島村か)あたりから下館市内を流れて鳥羽の江に流れ込んでいたといわれている。毎年のように洪水を起し良民を苦しめた鬼怒川を、僧浄弁の河川改修はこれを防ぎ、鳥羽の江に干拓地を開こうとした。この浄弁は、本名を久須麻呂(また唐風に訓儒)といい、ときの最高権力者藤原仲麻呂「七〇六—六四」の息男だったといわれている。この工事は古代東日本最初のそして最大の土木工事であった。

さて、この工事には奥州のエゾが俘囚として労働に多数連れて来られたらしい。陸奥守だった百済王家と浄弁の藤原南家とは姻戚を結び親しくしており、筑波山の開基といわれる徳一菩薩は仲麻呂の子ともいわれている。

先述の安食という地名は筑波山・利根川沿いに三方所もあり、阿知吉士の一族が多く住み着いていたと思われるが、百濟王家はその主君筋にあたり、浄弁も政治的動員が楽に出来たものと思われる。

筑波と將軍神と関東平氏の血縁

筑波山は古代に山が御神体だったのだろうが、徳一菩薩が開山する時、將軍稻荷が祀ってあったといわれている。稻荷はもちろん帰化系の神様だが、將軍という名称もやはり帰化系を意味するのではないだろうか。

將軍は国家の辺境に立ち外敵を防ぐものだといわれ、また勝軍地蔵ともいい、將軍神は訛ってシヤグジン＝石神となり、辺境に立つて外敵を防ぐという意味から村はずれの地藏信仰に転化したといわれている。そして、その由来は朝鮮半島の天下大將軍であろうと思われる。朝鮮の天下大將軍もまた、村のはずれに、恐ろしい顔をして立ち、外敵・悪魔を防ぐ木像や石像の神様である。

ここに征夷大將軍であった坂上田村麻呂「七五八―八一―」が阿知吉士の裔の棟梁であり、八幡太郎義家の母は將門「？―九四〇」の一族・平直方の娘であったところから東国の豪族達が、田村麻呂や義家そして頼朝に従った下地に將軍信仰が広まったゆえんがあるのである。

將門の遺児とも女婿ともいわれる平忠頼は日本將軍とも村岡將軍とも称したと伝えられている。この村岡の地名は鎌倉にもあるが、後三年の役後、朝廷から貰えなかった褒賞の代りに八幡太郎が郎党に与えた私財というのこの村岡があったかも知れない。こうして下総の村岡の地名が相州鎌倉郡に移ったのだといわれている。

將門の行なった除目で、相模守に任じられたのは文室好達（好立）であった。

文室は平群文室氏のこと、『平群系図』には、つぎのようにみえる。³

忠道「……」忠常「……」永盛 号平群將軍。母陸奥守從四位下平貞盛朝臣女。外叔父維敏（敏力）為子。実父秋田城介平群朝臣利方也。而祖父征東副將軍。天慶三年平將門追討副將軍。常陸介。正五位下。平群大領也。

号平群將軍。「平群」清幹之孫也。猶子頼義……

頼義は平致（平ねもと）幹の女との間に女子を設けているが、この『平群系図』はそのことを意味するのかどうか詳らかではない。また、鬼女伝説で有名な城氏の祖、維茂もこの系統だと思ふのだが。四郎將軍將基は頼義に従って奥州征伐に功があり、將門の遺領豊田郡を領して都のはずれ子飼川の中の島に加茂社を祀った。今日も金村雷神として土地の人々の崇敬を集めている。この將基は、將門四代の孫と称するが、繁盛四代の孫で政幹といったのを、將門の後継者を称するに至って同音の將基と改めたといわれる。

清幹・政幹・致幹などの名は、繁盛流の名である。繁盛は、將門追討軍に参加した事になっているが、なんの働きもしていない。

『平群系図』に見える忠通は、忠頼の子とも弟とも伝えられている。筑波郡に出子というところがあるが、ここは將門敗死後、遺児若松丸がかくれ住んだ地といわれ、叔父良文が見出してわが子として育てたので出子という地名になったといわれる。その子が後の忠頼だというのが、ともかく叔父の良文も貞盛の舍弟繁盛も追討軍に積極的に参加したとは思えない。

將門の子孫と称する家系は多いが、中でも千葉氏と相馬氏が有名である。このチバもソウマも中国・周の官職名司馬が訛ってできた名である。チバは日本語的に訛り、ソウマは朝鮮語的に訛ったといえる。英語のマーシヤル（元帥・將軍）がフランス語のマレシヤル（馬屋長・厩長）から出ているように、古代王朝で馬屋の長官は將軍そのものだったのだろう。司馬は將軍の古名だが、日本で司馬の名を持つものは法隆寺の三尊像を作った有名な止利仏師一家で、阿知吉士の一族である。司馬は誇り高き漢皇室一族の名ではなかったかと思われる。

倭馬の党

將門は主君「藤原」忠平の推薦で御厨（みくし）の下司に任ぜられた。御厨は伊勢か加茂の半官的莊園で相馬厨と呼ばれるものが千葉県手賀沼の南岸の岩井周辺にあったと思われるが（茨城県側にも岩井町は存在する）、將門の根拠地豊田郡にも金村雷神（加茂社）があるから、豊田郡にも加茂の御厨があったの

ではないかと思われる。村岡の隣に栗山という地名があるが、御厨山が語源だろう。下館市の東に小栗というところがあるが、ここには地方に珍らしい内宮外宮そろうた神明様がある。伊勢御厨があつたのだが、ミクリが、後年、御粟になり小栗になった地名だろう。小栗氏は将門慰霊のため阿弥陀堂を建てているし、東京の神田明神の氏子総代も小栗氏だった。当時、鳥羽の江の入江がこの小栗の近くまで来てたのかも知れない。伊勢の神は天皇家の祖霊と思われているが、運送業・旅行者の神としての一面がある神様で、鳥羽という名称は伊勢の鳥羽も京都伏見区の鳥羽も舟着場で、鳥羽は止場・波止場の意味なのである。この鳥羽の江も周囲に多くの運送業者が住み着いて居たのだろう。

東日本に磯辺（磯辺・石辺・五十部）という地名があるが、伊勢部のことで伊勢崎・石崎・磯前なども伊勢部が住んだところと思われる。それらのほとんどは、古代交通上の要路にあたる渡し場・舟着場である。下総磯辺は井上氏の所領となつてゆくのだが、この井上氏は、坂上田村麻呂の一族である。鳥羽の江の安食郷の反対側に井上郷があり、同じく、霞ヶ浦の安食の対岸にも井上がある。この井上に伝わる伝説に、琵琶湖の安食郷から二〇キロほどの錦織寺が出ており、琵琶湖の湖賊と霞ヶ浦の湖賊との関連をうかがわせるのである。もちろん鳥羽の江にも湖賊はいただろう。錦織寺もとの本尊は毘沙門天だが、錦織氏は田村麻呂の妻三善氏の一族で、やはり阿知吉士の裔である。錦織寺の毘沙門天も田村麻呂を祀つた勝軍地蔵だったのでないか。錦織寺を建てたのは井上氏であり、本尊阿弥陀如来は霞ヶ浦から出たのである。

井上・安食・磯辺そして鳥羽などの地名は、伊勢や加茂の御厨の物資の運送を基礎に運送業に従事した人々のまたその首領の住み着いたところだといえるのである。

『類聚三代格』には「此の国頃年、強盜蜂起し侵害尤も甚し、静かに由緒を尋ぬるに僦馬の党より出ずる也、何となれば板東諸国富豪の輩、皆に駄をもつて物を運ぶ其の駄の出ずる処みな掠奪による——遂に群党を結んで既に凶徒となる」と記されたのはこれである。

運送業者は容易に馬賊にも湖賊にもなれた。伊勢の神は、ここに強盜の守り神となつたのである。

関東平氏は帰化人？

貞観十七年（八七五）、下総の俘囚が反乱を起した。下野の俘囚と呼応して起した反乱だった。その主戦場となつたのが豊田郡を中心としたところであつた。現在、村岡と安食の中間に宗道という地があるが、もとは宗任と書いたという。宗道神社は安部宗任を祀っている。もちろん、宗任は時代のあとの人なのだが、俘囚の末裔達にとつては、義家に降りはしたが、誇れる唯一の英雄だったのであろう。俘囚達が土着して後代にこの神社を祀つたのだと思える。

この俘囚の乱を鎮定したのが下総守文室韓麻呂であり、名前から見て帰化系と何らかの関わりがあつた人だろう。さて田村麻呂の奥州征伐に副將軍として参加したのが文室綿麻呂であるが、先述の『平群系図』では秋田城介とか征東副將軍とかいつてるのは、この事をいつてるのだろう。本来、平群文室氏は蘇我系氏族と称しているのだが、蘇我氏は帰化人を管轄していたから、関東に土着し豪族化した帰化人が主家を僭称したのかも知れない。

平群文室氏は後に平氏を称するようになるのだが、平氏と姻戚関係を持つたから平群の群を削ってしまったのかわからない。その平群郡は安房の国にもある。将門を祀つた神田明神がもと安房から来たと伝えるのもこのへんに原因があると見てよいだろう。

天平宝字六年（七六二）の石山院奉写大般若経所解に「下総相馬郡久須波良部広島」なる名が見られるが、平氏の祖という高望王なる謎の人物も相馬郡にいた久須波良部出身だというだけで桓武帝の皇子久須波良親皇の子孫と称した可能性が大きい。

葛原部（久須波良部）はまた藤原部とも書いたといわれている。先述の藤原浄弁の本名を久須麻呂というのも、この部民を対象にした名前だったのだろう。

平氏が桓武帝の裔といわれている。これははなはだ疑問がある。しかし、

桓武帝時代から伝教大師・坂上田村麻呂などを頂点に経済・文化・軍事に帰化人が台頭し、それまでも蘇我氏とか百済王家などを通じて朝廷と連つていたのが、それらの仲介なしに直接、朝廷との結びつきを強め、民度の低かった関東に文化を持ち込んだのは、この平氏と呼称される人々だったのである。

律令の下積み

鳥羽の海の干拓・鬼怒川の改修の土木技術、そのための多量の物資運送などを担った人々の中で豪族になれた人はわずかで、その豪族に隷属した賤民のような人々が多く居た。それはオオミタカラ（大美宝）と呼ばれた良民と違つて、公分田を与えられなかった人々であった。俘囚達も同様で、俘囚稻を国家から支給されていたのだから農耕に従事したとは思えないのである。それら俘囚達の大部分が将門の軍に参加したのである。

将門敗死後、残党狩りがキビしく行なわれ、将門与党の俘囚の中で主だった者には、奥州に逃げ込んで再挙を図った者もいたし、将門一家の者で行を共にした者もいた。将門の遺子といわれる如藏尼（歌舞伎でいう滝夜叉姫）は奥州会津の恵日寺に逃げたといわれており、今でも如藏尼の墓が残っている。如藏尼は、地蔵尼ともいい、地蔵信仰を持っていたといわれ、弟の良門、そしてその子藏念の説話が、『地蔵菩薩靈驗記』にのっている。将門の遺族が地蔵信仰と繋がりがあるのは、勝軍地蔵から浄土信仰に移って行った経過を示すものである。

この恵日寺こそ筑波山の開山徳一菩薩が創建した寺で、平安時代を通じて会津盆地を支配した法王庁だった大寺である。その開創は大同二年（八〇七）といわれ、その前年桓武帝が崩御されているから、それを弔うためか、大同二年創建の縁起を持つ寺は関東東北に驚くほど多いのである。そしてその多くは縁起の中に田村麻呂が登場するのである。

田村麻呂は奥州征討にあたって、関東に散在土着していた百済王家にも繋がる帰化系豪族達を、動員したに違いない。彼らの多くは交通の要路にバン居していた。とくに律令の駅の長者などをしていた者も多かったに違いない。現在東京の浅草寺の対岸寺島あたりは、井上の駅という律令の駅だった。この井上駅は駅の長者に井上氏がいたのだらう。

これらの豪族を動員し、員数を増しながら田村麻呂は奥州にのり込んだのである。律令では駅家の管轄は兵部卿、つまりその当時においては田村麻呂の手にあった。将門軍中に坂上氏の名が見えるのもそのためである。戦後関東に帰還した彼らは、田村麻呂の一族を称したり、桓武帝の後裔を称したりしながら倣馬の党になっていくのである。

大同年間創建の縁起を持つ関東の古代寺院神社は彼らの氏寺・氏神として建てられたのであり、その周辺に神社莊園という形で武士団を育てて行つたのである。所詮、彼らは律令からはみ出してしまった人々であったといえるのである。

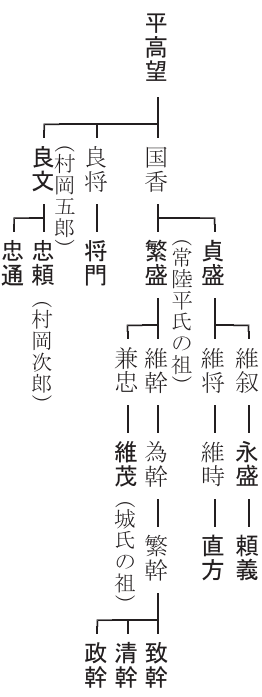
*1 奈良時代、民情を視察し、その窮状を救うために京畿七道に派遣された臨時の地方監察官のこと。

*2 平安時代中期以降の用語で、官吏を任命すること。

*3 『統群書類従』巻第四百四十六により、欠落部分や句点を補った。ただし、「平群系図」は平永盛の実父平群利方の系統を示すものであり、将門に仕えた文屋好達に直接結びつけることができるかは、現実問題としては微妙であらう。

*4 信濃戸隠の鬼女を平維茂が討ち取ったとする伝説が能や浄瑠璃などに翻案されている。『吾妻鏡』によれば、平維茂は、越後平氏の城氏の祖とされる。

*5 大仏の叙述に関連する関東（板東）平氏の系図をまとめると次のようになるだらう。ゴチックは文中に現われる名前を示す。



*6 昌泰二（八九九）年九月十九日の太政官符（原漢文は黒坂勝美編『改訂増補国史大系二五 類聚三代格・弘仁格抄』「吉川弘文館、一九六五年」、五六五頁）。